	1
恶	1 2 1 1
夂	5
媛	1
愛媛大学	1
<u>~</u>	ı
字	
	,
	7
	2
仲	1
11	(
咱	,
# #	2
道雅舞	
4) F	i
**	١,

腪 保持すべき心構えとして

さず、できることからっ

はじめから完璧を目指

LMG (Learning Ma

は、学内ガイドラインや

回紹介するレイヤーモデ

のでは、質の高い学習を

る。大学が、レベル2の 担保することは困難であ

「学びやすさ」やレベル

うに組み合わせたり、学

リットを最大にできるよ 同期」の特徴を理解しメ また、一同期」と

自由度がある反面、

سط

実験を行うことができ

て個別フォローアップを

い考察ができていたり

に依拠するならば、学習

る」としていたものを

ルは、オンライン学習の

テップアップする気持ち

ており、レイヤーモデル 等の整備がすでになされ nagement System)

を解決するためのヒント でなく、そのような問題 質保証の指針となるだけ

にもなる。例えば、学生

られる。なぜなら、ほど

る。ただ、そのようにT

の段階にあったと思われ

がオンライン授業を欠席

業にも対応した学内組織 するには、オンライン授 3の「学びたさ」を保証

対面授業と同等、もしく

てリアルタイムに応える

業において、LMSやテ

レビ会議システムを用い

カッションでは個々の発

対面授業でのディス

た小グループでのディス

ことができない点があ

挙げられる。また、学生

させることが難しい点が

るのであれば、評価方法

さらに、オンラインな

することができる」とす

実験方法について説明

ウトを防ぐ効果もあると
て成果物の質が高くなっ 行うことで、ドロップア と、対面授業の時に比べ

ている気がする、という

うに設計すれば、すべて

がコントロールできるよ

に必要な時間を学生自身

を修正することとなる。

同期型のオンライン授

ている教員もいる。例え らではの効果を感じとっ

> く、適切に設計されたオ 話を聞く。これは、恐ら

ンライン授業が、学生の

え、オンライン授業は、

を上げることが可能とい

の学生が十分に学習成果

まさにうってつけという

たりと工夫することで、 習目標によって使い分け

はそれ以上の効果を上げ

ったりした場合、LMS

テムの整備に本腰を入れ の編成、規定や教学シス

したり課題を提出しなか

(図1) のレベル1~3

て取り組む」ことが挙げ

ジャーな授業形態の一つ の懸念、他の新興感染症 奮闘は数か月に渡った。 染症の拡大に関連した合 け入れのための教職員の 学びを止めないため、そ 応がとられた。 在学生の イン授業への移行等の対 て新入学生の円滑な受 一脅威が続くと予想さ オンライン授業がメ 全国の大学でオンラ 第2波、 ・第3波へ るメリットは大きいと言 める効果的な授業方法 として大学教育に浸透す および、今後の課題等に から、大学教育の質を烹 授業を緊急時の代替手段 の授業設計上の留意点、 と継続・発展させるため このたびは、オンライン いて述べる。 オンライン授業を始 オンライン授業実施の

の)ゴールを目指そうと

イン授業を急遽開始する 学生を対象としたオンラ 学であっても、全科目全 CT環境が整備された大

の要件」を満たしていた ベル1の「情報デザイン 上での提示の仕方が、レ

イン授業に取り組むとい 当する教員だけがオンラ る必要がある。授業を担

> 単に解説すると、同期型 ることは可能である。簡

のメリットには、対面授

と課題設定のコツ

オンライン授業の設計

授業設計の考え方とし

うに、教員が、クラス全

合、対面授業のときのよ カッションをさせた場

ライン授業でチャット機

ことは不可能だが、オン 言をすべてキャッチする

ことの示唆ではないだろ ることにつながっている より深く考えさせたりす 思考を活性化させたり、

すもの

ことになる。

オンライン授業が目指

体の進行やグループ内で

よって発言させること

学生の思考を個々に

明することができる。と 学習の時間モデル」で説 応は、キャロルの「学校 能を活用し、書き込みに

このような望ましい反

すべてオンラインで同じ

面授業でしてきたことを

オンライン授業は、

ようにやることを目指す

のではない。対面授業で

の発言状況を把握するこ

とが難しい。また、学生

対面授業でわからな

が可能になる。このよう 文字化・発信させること

いことがあればすぐに隣

に高い(対面授業並み

業は不慣れであり、一気

教員ともにオンライン授 んどの大学では、学生・

後

荷がかかり、学習効果を 緊急事態では、従来の対 低下させかねないからで 面授業を前提として創い すると、双方に過度な負 さらに、今回のような ことへの困惑は大きかっ

たのではないだろうか 対面授業のみで授業を

したコースにたどり着く 仕組みを整えていくこと が必要になるだろう。

のか、もしかすると指定 うよりも、組織としての

業と同様、多数の学生に

までのナビゲーションや

同時に臨場感のある学習 を提供できる点が挙げら ては、対面もオンライン

して

も基本的には変わらな

/学教育の更なる活性化を目指

と、リアルタイムでの教 席の友人に尋ねるな

ユーザビリティに改善の オンライン授業のリソ

の「継続」を目標として を受け入れ、まずは学習 想転換が必要であること レベルーから整備する必

主なID技法

動機づけ設計法 (ARCSモデル) 成人学習学の原則

学習支援設計法 (9教授事象) 構造化・系列化技法

プロトタイピング 形成的評価技法

学習環境分析 メディア選択技法

ニーズ分析法 職務分析法 内容分析法

目の前の課題をクリアし

ていくことが現実的であ

教員向けのICT研修、 要があり、予算の手当め

継続的学習意欲、没入感、つい余分なことまで、将来像とのつながり、自己選択・自己責任、好みとこだわり、ブランド、誇り 学習課題の特性に応じた学習環境、学習者のニーズにマッチした学習す援要素、共同体の学びあい作用、自己管理学習、応答的環境

操作性・ユーザビリティ・ナビゲー ション・レイアウト、テクニカルラ イティング

内容の正確さ、取り扱い範囲の妥当 性、解釈の妥当性、多義性の提示、 情報の新鮮さ、根拠・確からしさの 提示、適正な著作権処理

─── アクセス環境、十分な回線速度、 IT環境のレベルに応じた代替利用 方法、サービスの安定度、安心感

CTスキルにある程度の ながら、学生と教員がI る。そして、試行錯誤し

> ョン等、オンライン授業 学生へのオリエンテーシ

解し合いながら双方向: 自信をつけ、お互いが了

労力を要したと推察す

ように、授業を再構成し のある学習を進められる

オンライン授業の質保

が拡大するにつれて、授

グを導入していた大学

が問題となっている。今 が、一定数存在すること 題を提出できない学生 業に出席しない学生や課

レベルーに留まっていた

わせて授業を構成すると

できる点がある。デメリ

や、大学側の抜本的な発 上げられたルールの変更

オンライン授業設計の要点と今後の課題

授業設計は、あくま えあい学びあいで補える ンライン授業ではタイム ことが多い。しかし、オ

ず、

受け身になりがちな

できるようになる。同

員が教えようとすること

的・効果的な学習を支援 利用することでより自律

したりすることを目指す

期・非同期にかかわら

ことで、学生それぞれの

ムシフトを示したもので ら時間の差へのパラダイ のモデルは、能力の差か

ることで学習機会を確保

したり、ICTツールを

の学習をオンライン授業

に適したかたちに変換す

あり、キャロルは、「教

内容や考えを可視化

な機能をうまく活用する

オンライン授業を設計す

選択するのは、教員では をかけて学ぶかどうかを を学ぶために必要な時間

べきである。

なく学生自身である」と

や思いを積極的に表現さ

業内容を90分の授業時間 述べている。つまり、授

業のみに戻ることはない

だろう。オンライン授業

が全くなくなり、対面授

今後、オンライン授業

に理解できる学生もい

思考を可視化できる

向こうにいる学生の考え るにあたっては、画面の

ションも可能であり、他 を見ながらのディスカッ れる。また、画面上で顔 タイムにできる点があ がある。こちらも基本的 相談されることに、オン 授業設計に関連してよく まついていけなくなるケ オンライン授業後のレポ 学生を減らすためには、 ースがある。そのような リーに聞けずに、そのま

余地があるのかという視 期型のメリット・デメリ ース選択と同期型・非同 授業に不可欠である。使 オンライン は、すべての学生を同時 一方、デメリットに な考え方は対面授業と同

ートや出席カードに、学

んだことだけでなく、わ

いくことが肝要である。 ように設計、再設計して

み返しなどの時間をかけ れば、授業後に確認や読

て理解できるようになる

期・非同期とのブレンデ

ィッド型、LMS機能と

ものにするためにも、同

をより効果的・魅力的な

力の差から時間の差

ることで、より良い授業 想され、授業の質保証が 学生目線で評価し改善す として定着することが予 いる教材を吟味するよう る。普段、対面授業で用 実践につながるといえ 点で授業を評価してみ ン授業が授業形態の一つ という使い方もでき といったシンプルな活用 籍、ビデオ、DVD、W れ以外のリソース(書 たら、LMSの機能とそ レポートを提出させたり 義動画を視聴させたり、 刻に参加させるという運 は、学生のペースで学習 受ける点がある。 ットワーク環境の制約を 非同期型のメリットに

ebリンク等)を組み合 繰り返し学習することが じであり、到達目標が変 わらないのであれば評価

方法も変える必要はな て変更を加える必要があ 評価方法もそれに合わせ 標が変わるのであれば、 授業となることにより目 い。ただし、オンライン してもらうことが効果的 からなかったことを表現

である。これにより学生 要な学生を抽出すること ろやフォローアップが必 が理解しにくかったとこ

ができる。また、このよ 達レベルが高くなった 施したところ、課題の到 テストの正答率が上 オンライン授業を実

る。例えば、これまで うな反応を手掛かりにし がったり、レポートの深 という考え方である。つ まり、キャロルのモデル

近、一部の教員か 力の高低ではなく、学生 学生もいる。これは、能

のブレンディッド型授業

Webリンク、書籍等と

使し、これからの大学教

など多様な授業形態を駆

人一人の「わかっ

必要な時間が異なるだけ た!」と理解するまでに

が望まれる。 育がより活性化すること